

(仮)

どんな物語でも、それを見た、聞いた、読んだ人の数だけの解釈が存在します。今、この世界も同じで、人によって全く違う世界を生きているのです。

僕は今年18歳の高校生だ。世界の事はほとんどもう知り尽くしていると、そう思っている。だけど、もしかしたら僕が今信じている世界は大人たちにそう思わされているだけで、世界は今自分が思っている世界とは全く違うものなのかもしれない。歴史とかも本当にあったように教えられているだけで、実際はそんな過去は存在しないのかもしれない。物理法則だってそうだ。僕はそう教えられてそれをただ信じているだけで曖昧なままに納得してしまっている。地球は丸らしいけど本当か？僕以外の人間は本当に存在しているのか？というか僕は存在してるのか？とまあ疑い出したらきりがないのだ。もし今の世界が全部嘘で本当の世界ってモノがあったとしたら…。

大して変わらない日常、大学受験が迫っていて勉強に追われる日々。そういうモノだと無理矢理自分を納得させて親の命令に従い毎日塾に通っている。僕は割と頭がいい方らしく、この調子ならこの国の最高クラスの大学に受かると塾の先生が言っていた。特に夢があるわけでもない僕は大学に行ってあと4年間猶予をもらおうって魂胆だ。こんな感じでいつも周りに流されながら生きてきた。可もなく不可もない人生だったと思う、といってもまだ18年しか生きていないだけだね。

目覚ましと共に起きる。目覚めとともに僕の平凡な世界が始まる。くだらない夢を見た気がするけど忘れた。これもいつも通り。だけどいつもとは違う点が一つあった。見たことがない人物が部屋の壁にもたれて僕の事を凝視している。これが屈強な男だったりしたなら僕は思わず悲鳴をあげていたことだろう。だがそこにいるのは神秘的な雰囲気纏った華奢な少女だった。でもまあ十分に驚いたけど。

「あの…、あなた、だ、誰？」

僕は動揺を隠せないまま少女に声をかける。少女は驚いた顔をした後、少し寂しそうに言った。

「わたしがわからないのか」

見た目に反してとても大人びた口調で少女は言った。私がわからない？どこかで会ったことあったかな。僕の部屋まで入ってきているのだ、それなりに親しいはず…。眠い頭を奮いたたせ、思考を辿るが思い当たらない。名前を聞こうと声を出しかけたとき、もう少女はもういなくなっていた。

ふと時計を見ると遅刻ギリギリの時間、「やばい、遅刻する」と言いつつも重い体は動いてくれない。やっとのことで体を動かし学校に行くことにした。

学校に着くといつも通りの時間が流れる。だが僕の頭の中だけは時間の流れが違った。消えたあの少女の事を考えていると時間が前に進んでくれない。あの子は誰だろう？名前は？何のためにそこにいたのだろうか？そんなことを考えながら授業を受けていた。「ボーとするな」と先生に言われたが先生の言葉など右から左である。それほど少女の事が頭から離れない。

授業が終わりふとグラウンドを見ると今朝見た少女がいたような気がした。いや、いたに違いない。僕は急いでグラウンドに向かった。しかし、そこには少女の姿はもうなかった。あきらめて帰ろうとしたとき少女が門にいるのが見えた。また向かうと消えてどこにいるのか分からなくなってしまう。どこかに誘っている予感がした。帰り道、少女はまた現れては消えるという繰り返しで結局家に着いてしまった。少女が連れてこようとしたのは僕の家なのだろうか。

家に着き自分の部屋へ行く。しかしそこには少女の姿はなかった。少女は何を伝えようとしているのだろうか？あった事があるようなないような、実は僕が忘れていただけなのではないだろうか。そうじゃなくて、実は少女は僕の事を知っていて僕に気付いてほしくて姿をあらわしたり消えたりしているのではないか。

気が付いたら寝ていて寝汗とともに起きた時には外は闇の世界となっていた。時計を見たら夜中の2時を回っていた。

目を覚まし起きた時に僕を指差している少女の姿が見えた。驚きのあまり声すら出ない驚きようだった。見える、今度はしっかり見えた。

僕は話しかけようと「ねえ、キミ」と話しかけたが反応がなかった。

僕はもう一度呼びかける。

「キミは誰？」

少女は僕を指差していた腕を下ろし寂しげに俯いた。しばらく沈黙が流れる、とても気まずい空気が部屋を満たす。少女がからかう様に言う。

「あなたこそ誰なの」

少女が言った言葉を咄嗟には理解できず、思わず首を傾げてしまった。この少女は誰かもわからない他人の家に、部屋に忍び込んでいたって事か。何を目的に？泥棒か、それともストーカーだったりして。いやいや、そんなばかな。

「わたしの知っているあなたはわたしをキミなんて呼ばない」

なるほど、やはり僕はこの少女のことを知っていなくてはならないらしい。しかし思い出すことがどうしても出来ない。ここまで思い出せないのならば、もしかしたら人違いかもしれないぞ。そうだ、そうに違いない。

人違い？

人違いだとしたらどうしてここにいる？謎が謎を呼ぶ。お互い口を閉ざしたまま無言の時間が過ぎて行った。

向こうは、僕の事を多少は知っている様子だ。僕が少女の事を忘れていただけかもしれない。とりあえず僕は、答えてくれないかもしれないけれど少女に話しかけてみた。

「どうしてここにいるの？」

「どうして僕の事を知っているの？」

「どうして僕の家にいるの？」

と立て続けに聞いてみた。少女はなかなか口を開けなかったが、ようやく重い口を開いてくれた。

「私はあなたのことをずっと見てきたの」

「いつでもあなたのそばにいたの」

少女はやっと話してくれた。

「えっ…」

「そんなバカな、ありあえない、絶対にあり得ない」

それなら絶対にわかるはず、知っているはず、気付くはず。気付かない僕が悪い。僕はどうしてしまったのだろう。僕は記憶喪失なのか、そんなはずはない。ちゃんと僕は、小さなころからの記憶をちゃんと持っている。少女との記憶だけ丸々なくなっているのか？僕の記憶は何なんだ？つくられた記憶なのかもしれない。僕はどうしてしまったんだ。僕はパニックになり深呼吸し気持ちを落ち着かせた。

落ち着きをとり戻し、部屋の電気をつけ、少女のことを観察する。壁にもたれかかり僕のことを無表情に見つめている。服装は僕の通っている高校の制服を着ている。身長は145cmくらいか。僕はふと気になった、何というかこの少女は存在感が薄いのだ、そこに確かに存在しているように見えているだけで実際は存在していない、そんな錯覚を感じさせられる。まじまじと少女のことを見つめていたその時、その体が一瞬ノイズがかかったようにぶれたような気がした。ふと気づき少女の足元に視線を伸ばす。影がない、あるはずの少女の影がそこにはなかった。もしかしてあれか、幽霊とかそういうのですか。だがなぜか、恐怖という感情はこれっぽっちも浮かばなかった。

「もしかして幽霊とか」

「違う」

なるほど、よくある死んだことに気がついていないパターンだ。とか勝手に決め付けて自分を納得させようとする。

「私から見たら、あなたの方が幽霊」

「僕のほうが幽霊だって？何を馬鹿な、どう考えてもキミの方が幽霊だろう」

「そうかしら。ずっと同じ事を繰り返している、まるでゲーム内のNPCの様。胸を張って

自分が今生きていると言える？あなたに意思はあるのかしら」

確かに僕はこれまでずっと人に流されて生きてきた、だけどそれは自分の意思でそうしてきたんだ。意思を僕は持っている。

「ごめん、今のは冗談、どう考えてもわたしの方が幽霊ね。でも、今までのあなたはそう”設定”されていただけで何の意味も持たないの。なぜなら世界はまだ始まっていない、そういう事らしいから。」

「言っている意味がさっぱりわからないよ」

「ここからが本題。これは、私にこの事を教えてくれた人の受け売りなんだけど『世界の設定の部分は終わって、世界は変わる。本当の世界の始まり。今まで設定によって制御されていた世界はその支えを失って、ありのままの姿になる。そして90日後世界は終わる』」

なんだか新手の宗教の勧誘をされているような気分になってきた。訳がわからない。世界が終わる？何を言っているんだ。電波か？

「その人も、今あなたの前にわたしがいる様に、世界が変わる前日に幽霊が現れて世界が変わるだの終わるだの、訳の分からない事を言って消えていったそうよ。そして実際に世界は変わった、そして終わった」

つまり明日世界が変わり、90日後には終わるということか。

「仮にそれが本当だったとして、キミはなぜ僕の前に現れた」

「わたしは…、あなたに命を救われた。そして、その際にあなたは命を落とした、わたしは世界の終わりからから世界の設定の部分、世界が変わる前日のあなたに干渉している。わたしはあなたを死なせたくない。分かり安く言うと、私を守ってあなたが死ぬ”過去”、あなたにとっては”未来”を変えるため今ここにいる」

どうやらこの少女は世界の終わりから来たらしい。っておいそんなこと有り得ない。

「どうしてそんなことが出来るんだ？」

「90日後の時点で生き残った人間は、次の世界の人間の一人にこのような感じで現れ知識と力と託す事ができる。」

力と聞いて若干わくわくしてしまった僕。

「力ってどういう力？」

「どんな力はわからない、人それぞれらしい。今回何人生き残ったかはわからない、でも、わたしがあなたに今そうしているように知識と力を託された人間が少なからずいるはず。変わった世界では、今までの物理法則では考えられない能力を行使する人間が現れる。それは敵かもしれないし仲間になるのかもしれない。注意するのは力を持った人間」

僕の力はいったいどういう物なんだろう…。おいおい待て、というかこれは夢だ。夢じゃないとすれば、幻覚。やはり僕の頭がどうにかしてしまったのか。精神科のお世話にはなりたくない。

「今からわたしの知っている事をすべて話す、この先わたしの知ってる通りに世界が進むとは限らない。でも、きっとないよりは役に立つはず。メモの用意をして」

「メモなんかしないでも、キミがずっと僕の傍にいてくれればいいことじゃないか」

少し自分で自分の言ってしまった言葉を後悔した。なんか告白っぽい気がして恥ずかしくなったのだ。

「世界が始まってしまったらわたしは元いた場所に戻らなくてはならない。その後どうなる

かは…、わたしにもわからない」

少女はわからないと言っているが、なんとなく予想は付く。きっと少女も分かっているのだが、それを口にはしたくないのだろう。僕は「どうせこれは夢、僕の妄想」と思い込む事で切ない気持ちを紛らわせようとしたが、うまくはいかなかった。

「もう時間があまりない、早く」

急いでノートパソコンの電源を入れ、少女の言う言葉を漏れなくメモを取る。あまりに荒唐無稽な内容ばかりで、とても信じられるものではなかった

ベットの上で目を覚ます。昨日、すごいヘンテコな夢を見たせいか、寝覚めがあまりよくない。机をみるとパソコンの電源が入ればなしだ。画面をのぞきこむと、そこには。

「こんな形だったけどあなたにまた会えてよかった」

というメッセージが残されていた。上にスクロールしていくと何だか書き覚えのある文章が。

「おいおい…」

夢じゃなかった。

「世界が変わるとか言ってたっけ」

特に今のところ何も変わったところはない。とりあえず昨日夢で書いた書類をプリントアウトして鞆にしまいこんで学校へ向かうべく家を出た。

通学中、僕は頭の中を整理していた。つまり、あの少女の干渉を受けなかった僕は、何らかの理由で少女と出会い。そして、恋人…とまではいかないかもしれないが、友好を深め、そしてその僕は少女を守って死ぬ訳だ。自分としては中々格好の良い死に方じゃないか、とか思ってしまったけど、やっぱり出来れば死にたくはないな、どうせ90日後に世界は終わるらしいけど。少女に聞いた話によれば、今この世界は危険極まりない世界になっているらしいので気を抜けば簡単に死ぬそうだ。簡単に死なないように昨日僕は苦勞してメモを取ったのだ。現状を見るからにとってもそんな危険になっているようには思えないのだが。電車に乗っている間僕は鞆からプリントアウトした紙を取り出し、読んでみる事にした。これが僕に与えられた知識という訳だ。メモを取っている時は既に意識が朦朧としていたため、書いた内容はほとんど覚えていない。

「どれどれ…」

『一日目に学校へ行ってはだめ』

「……………」

具体的に僕の行動を制限する文はほとんどない中、この文はすごい浮いていた。どうする、引き返すか？だが、僕は何だか引き返してはならない気がした、僕の第六感がそう言っている。決してダメといわれたからやりたくなる心理とかそういうものでは断じてない。と思う…。きっと学校にはあの少女がいる、だってうちの制服着てたしね。そして、学校で今日何かが起こる。僕が行かなければ少女が死んでしまう。少女は自分を見捨ててほしいのだ、そうすれば僕の危険が減ると。と、勝手に自己満足な解釈をした。何だかテンションが上がってきた。そういえば僕の力って一体どんなものなんだろう、早めに知っておきたい所だ。いよいよ僕も思考が逝っちゃってきていると思う。これも世界が始まったのが原因なのか？プリントアウトした紙の内容を一通り頭に詰め込み、僕は校門をくぐった。

学校までの道は、特に何も変わったところはなかった。ということは、やっぱり学校で何かが起こるのか。少女の事を完全に信じたわけではないが、なぜか嫌な予感がする。少女が学校に来るなど言ったからには、何かあるはずだ。

門をくぐると、まず、グラウンドが閑散としていた。次に教室の方に目をやると教室までも静かな様子だった。いつもは、馬鹿どもが走り回ったり騒いだりしているはずなのに。学校の玄関をはいるといたるところに血の跡が見えた。

「なんなんだこの血の跡は」

いったい何が起きているというのだ。昨日とは何かが違う。何なのかはいまいちわからない。本当に世界が変わったというのか。

「そうだっ、少女がどこかにいるはずだ、少女を見つけることができれば何かわかるはず。」

少女は、僕が少女を助けて僕は死んでしまうと言ってたけどそれはどういうことなのか？助ける？ってことは、襲われているのか？それを助けて僕はその被害にあうということなのか。殺し合いが繰り広げられているのかもしれない。さっき見つけた血の跡も殺し合いをやっている証拠なのかもしれない。とりあえず、教室に行けば何かわかると思い、教室に急いで行くことにした。

「キャー助けて。」

「誰か、誰か助けてー。」

という悲鳴とともに同級生が教室から出てくるのが見えた。僕は急いで悲鳴が出てきたところに向かった。するとそこには、化け物か魔物か今までゲームでしか見たことがないような恐ろしいものがこっちを見ていた。僕は、驚きすぎて一歩も動けないまま腰を抜かしてしまった。動けないまま僕は、血の惨劇を目の当たりにしてしまった。そこには化け物たちが人間をごみ箱に捨てるがごとく、殺していた。足がないもの、手がないもの、頭がないものなど人間の形をしていないものがいたるところに散らかっていた。失禁して気絶している奴内臓まで飛び出ているに耐えきれないものたちが教室を埋めている。何が起きているのか全く理解ができず、体だけでなく頭まで止まってしまって、その惨劇を眺めているだけになっていた。

やっとのことで我にかえることができた時、胃の中のものが一気に外に出てきてしまった。人間の遺体を見たのが初めてで、よりによってあんな姿を見た反射行動なのだろう。とりあえずオレは、夢だと思い、自分の頬をつねってみた。悪い夢なら覚めてくれ、お願いだ、覚めてくれと願いながら頬をつねる。

「夢じゃない、これが本当に現実なのか、この世界が少女が言っていた世界なのか？」

もう少女の事を受け入れて信じるしかない。本当にあと90日でこの世界はなくなってしまうんだ。そんなことを考えると絶望が迫ってくるような気がした。少女が言っていたことは本当なんだと改めて信じることにした。

僕は口元を拭って立ち上がった。ぐずぐずしている暇はない、今あいつらに見つかればろくに抵抗も出来ずに殺されてしまうだけだろう。両親は無事だろうか、そんな事が僕の頭をよぎった。本当にこんな事になるのなら予め連絡を入れておくべきだった。だが連絡を入れたところでどうなる、今この世界に安全な場所何てあるのか。後悔しても遅い、僕は今出来る事をするしかない。学校はパニック状態に陥っていた。こんな状態ではとてもあの少女を見つけられる気がしない。くそ、どこにいるんだ。もしかして学校にはいないのか？その時、背後におぞましい気配を感じて振り向くと、そこには禍々しい化け物と少女がいた。なぜか化け物は少女の事を襲おうとはしない。

「何をやっている！？逃げろ！」

少女は不思議そうに首を傾げた。化け物は少女に寄り添っている。この化け物は、さっき見たやつとは何かが違う。

『人間は全部殺せ』

おぞましい声が空から聞こえてくる。その直後僕は、先ほどの見た魔物に取り囲まれていた。

少女と化け物の関係は今はいい。この状況をどうにかしよう。倒したい気持ちはあったが気持ちだけが強く体が言うことを聞いてくれない。化けものは今にも僕を襲うとしていた。

突然化け物が襲ってきた。その時、少女に寄り添っていた化け物が化け物にけりを入れて助けてくれた。

「こっちに来て、速く」

少女が、その場から逃げれるよう助けてくれた。少女と僕は一緒にその場から離れるためにめいっぱいの力で学校の廊下を走った。ついでに、少女の仲間らしき化け物も付いてきた。逃げている途中少女と化け物の関係を聞こうとしたが、落ち着いてから聞くことにした。

一先ず屋上に上がり、一息ついた。

「わたしは気がついたらここにいた、それより前のことは何も覚えてない」

そして少女にはこの化け物が人間に見えるらしい。記憶喪失だなんて、あの時僕の前に現れた少女はそんなこと一言も言っていない。それに何だこの化け物は。あの少女が体験した過去とは既に大きな食い違いがあるのだろうか。それとも、この展開は予想道理で、少女が僕にそれをあえて言わなかったのか。もう僕は何を信じていいのかわからなくなっていた。それに、なぜ僕はこの少女をこんなにも守ろうと思っているのか。自分で自分が理解できない。たかが夢か現実かもわからない、そんな場所で少し話しをしたただけだ。でも、そんなことはどうでもいいのかもしれない。



設定とか、世界の終わりとか、そんな事に意味なんてなくて、今自分が認識している事が全てだ。僕の認識ひとつで、今のこの状況は無限にその意味を変えてしまう。それはあくまで僕の中だけでのことだ。でも、それに何の問題があるのか。自分を認識できるのは自分だけ、他人の生きている世界と僕の生きている世界は違うのだ。

これは、どこかの誰かが認識した世界の話。その認識を「解釈」するあなたの物語。

つづく…？